

太刀 包長

長享二年六月日(一四八八)

大和 長享

手孫

「包長」

長享の包長は包長の五代目と、われ、初代は貞和頃(二三四五)で二代包永の子まには内人で包長の親と依えている。伊勢の粟林院の包長は長享の包長の次の世代のものが物産としたものと思われ、文永・永正・享祿・天文・天正の年紀があり、数石が、ると思われ。

平成二十七年四月十七日

刃長 68.5cm (二尺二寸五分)

元重 0.55cm (0.55cm)

茎中 2.70cm

鑄造、厚薄低く、鍋巾はやや狭く鍋高は葎葉で身中の葎葉な造込みとなり、切先は中切先でフクラは徳水、反りは中間反りが高めとなる。

北鉄は小破目に去目と破目と交じえ刃よりは破目が流れて、やや肌立ちかけんに北湯がフエ北葉が沈む、咲りは淡く丸めれる。

刃文は直刃、手元は浅く湾れて淺湯とし、刃縁は肌からんで二重刃、喰違へ、打のけ玉見せ、母中は小足が入り

金筋・砂流しを交じえる。

彫刻 表裏に両ナリ、やや流れた丸止めの特挿を極く、

母小丸の 棟角小丸(山) 鑄は檜垣、目釘記は二個、銘は細整て平此に作者と

半記を表裏に切る。貫縁十分 銘は太刀銘、さらに年紀が著く珍らしい。

鑑定刀

反り 2.5cm (七分六厘)

元重 0.55cm (0.55cm)

茎中 2.70cm

切先長 3.20cm

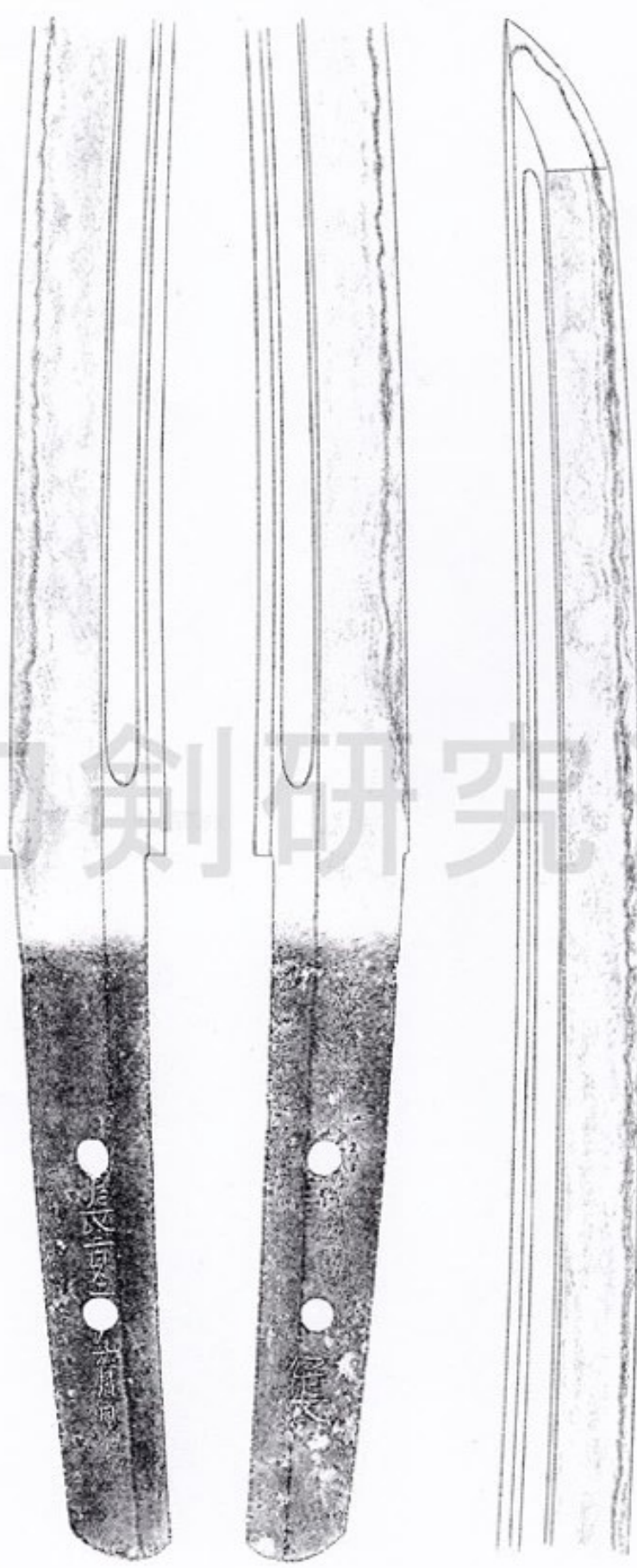
茎長 14.2cm (14.2cm)

茎先重 0.46cm (0.46cm)

元中 2.5cm (2.5cm)

先中 2.5cm (1.77cm)

茎反り わすか



刀劍研究連

刀 丹後守藤原廣幸

「弘幸」一平安成藤原弘幸

「平安成振川任弘幸」

「藤原弘幸」

「丹後大城藤原弘幸」

「丹後守藤原弘幸」

「丹後守藤原弘幸」

「山城國振川住清水丹後守藤原弘幸」

廣長

本國美濃 弘幸同人

振川國振門人、のちに弘幸に改める。

兼物。

同二十七年四月十七日
平成二十五年十二月十四日

刃長 67.7cm (二尺三寸三分四厘)

元重 0.48cm (0.44cm)

葉中 2.77cm

鑄造、唐鐔舞草、鍋巾は広めて鍋口低く、重ねは尊等て身中の広、造込刀となり、先中は広く切先が延びて

フアラはやや括れる。反り中内反りに先反りを加えた、慶長頃の刀姿となる。

地鉄は板目に奎目で肌立ちながら細かな地沸がつき、肌は赤って地帯が沈む。よく練れて強く美しい、銚となり、濁へがある。

母文は考水に至る目、刃縁は沸が板目の肌からんで、二重刃や喰違、が見られ、金筋・砂流し・足・葉が激しく

しきりに入り、肌が立つ。光の強、沸が厚くつぎ口は明るく消える。

帽子は乱れて本母と同様の働きがあり、先は小虫で掃けて返る。

差は主ふ、鍋巾鍋高は尊等、元重ぬに比較して先重ぬを相當に薄く著す、差尾は栗尻、刃角口

鑑 表は切に直、輪子下り、表は切。目釘穴はやや大きめに一組、銘は両張ってやや小振りの長銘を太めの鑿で

鍋口に切る。

廣幸傑出の一振りて代表作と、える。

鑑定刀

反り 1.50cm (四分四分)

元重 0.48cm (0.44cm)

葉中 2.77cm

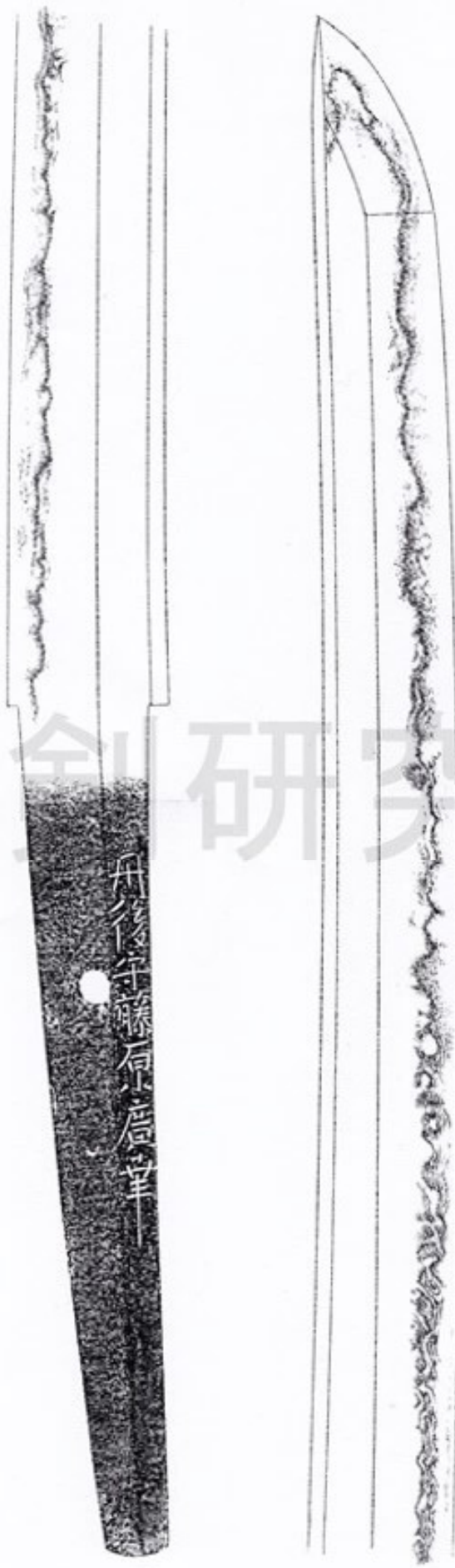
先中 2.40cm (2.30cm)

葉長 1.70cm (1.60cm)

葉反り 0.50cm

葉重 0.29cm (0.25cm)

陳前



丹後守藤原廣幸

刀劍研究連

脇差 相州佐隆慶

相模 文明

「相州佐隆慶」相州佐藤原左衛門尉隆慶

。二代隆慶は文明から長享までの年号がある。

。初代は助慶門人て若吉慶と云。

平成二十七年四月十六日

鑑定刀

母長 2寸8分(一尺七寸五分八厘) 反り 2寸3分(七分七厘) 元巾 3寸6分(一寸五分) 先巾 1寸7分(五分) 元重 0.25(五分) 先重 0.25(五分)

錫造、三ノ棟低く、中切先のフクラはやや柄杓、強く先反りを加えて踏張りがついた片打の姿と成る。地鉄は板目に菱目交じりて肌立ち、地沸は厚く地葉は肌につけてしきりに入った、よく練れた強一鉄で、鉄色は黒味を帯びて明るく、みえは昏ぼ、手元は低く小豆の目に小丁字、中程より上は互の目に丁字で、鏡中に高低があり、鑢返と練炭を焼く、足、葉激しく入り、肌にからんで金助砂流し交じり、匂は深く湯が厚く豊かにつき、匂口は明るい。帽子は一枚に近く、金助砂流しが激しく入った所謂火笠帽子となる。彫刻表は梵字に華の具利迦羅、表は徒字に四柱その下に蓮台。葉は生ふ舟底まで先は火り先味の刃上り粟尻、刃角小開の目、練小丸(山) 録目は切り、強く魅力的な地・刃に彫刻が華を添えている。



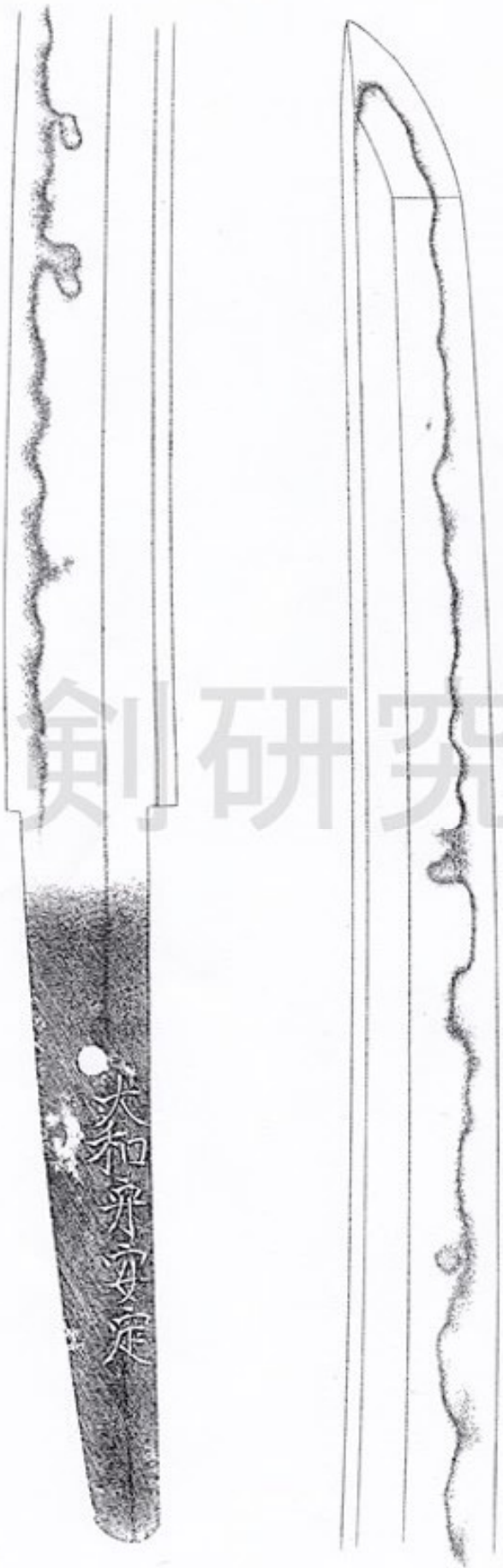
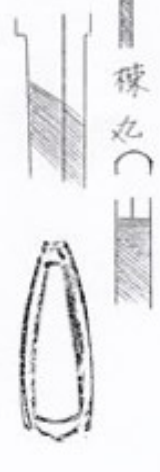
脇差 大和守安定

武藏 万治

「大和守安定」
「紀州和歌山佐安廣造、大和
大掾安定作」
「奉納御太刀富田大和守安
定於武州作之、大日本國備前(能)藩山葉印
守、慶安武州五年九月十八日」
富田宗兵衛。寶文七年の作に五十三歳と
あり、元和四年(一六二一)の生れとなる。
近代では、右鍛冶備前の本國越前が多く
同いられてゐるが、紀州佐安の空廣との
合作の脇差が現存し、「新刀并経」に「武州
江戸住人、大和守安定の切、富田と切在堂一
家なり」、さらに同書に「安定、紀州」とある。
これらによつて、紀州佐安派の本身であること
に間違はないものと思われる。

平成二十七年四月十七日

刃長 50.4cm (二尺六寸六分三厘) 反り 0.27cm (二分九厘) 元中 3.27cm (三.10cm) 先中 2.51cm (二.14cm)
元重 0.66cm (0.67cm) 先重 0.48cm (0.48cm) 切先長 3.25cm 莖長 10.0cm (10.0cm) 莖反り わずか
莖中 2.70cm (2.63cm) 莖中ノ筋 1.32cm (1.32cm) 莖元重 0.69cm (0.69cm) 莖先重 0.32cm (0.32cm)
鍋造、庵棟高く、鍋中は莖筋で鍋は低く、身中の広い造込オとなり、切先は中切先、反りは中向反りが浅い
明磨から實文の姿となる。
地鉄は小枝目に小奎を交じえてやや肌立ち、微塵の地沸が厚くつき、地色は黒味を帯びる。
刃文は汚れに至る目やや前張り、所々能境を淺く、乱れの谷は沸が深く、刃中は太い足が入り、匂口は明るく
牙える。
帽子は直刃で浅く汚れ、先は丸く返る。
莖は生ぶ、鍋中は莖筋で鍋は低く、先は刃上り栗尻、刃小丸なり。 疎丸 ()
鏡は大筋違、磨出しに比較して先の鏡の両度が急になる。
目釘穴は一個、銘は鍋地にかけながら切る。
地・刃健全、出来も優れている。



短刀 濃州関住兼常

天正二十二年八月吉日 (一五五三)

兼常 天正

「兼常」濃州関住兼常

「関住兼常元次」「濃州関住兼常」

兵三郎・剣戸助右衛門。

式藤兼常家の祖。

天正十六年(一五八八)十月没。

天正の初め頃より天正までの作がある。

天文元年から天正十六年まで五十六年間に及ぶ、代替りがあったものかと思われる。

平成二十七年四月十六日

刃長 27.2cm (八寸九分七厘)

茎反り 無し

平造 庵棟尊常、重ねは厚めて身巾の豪華な造込で、フクラは枯れ、中間及りの強くついで短刀姿となる。

地鉄は小枝目に小玉、刃よりは極目が流れてよく約オ、地沸が厚くつる地景が交じる。鉄色は黒味を帯びて澄みわたり、明るく湧えて濁りがある。

刃文は直刃、足・葉・砂流し入り、匂は深く小疵が厚くつき、明るく湧える。

帽子 表は浅く湧れて先は丸く、返りの焼中は広、裏は表と同様だが、刃方に倒れかけとなる。

彫刻 表は素剣、裏は護摩首。

茎は先ぶ、長寸で先は浅く刃上り栗尻、刃角小内り、棟角「」鑢角「」鑢は檜垣、目釘穴は一伯、銘は居住地と作者

ここに製作年記を表裏に切る。地・刃は明るく湧え、年記も貴重。

鑑定刀

刃長 27.2cm (八寸九分七厘)

元中 2.36cm

元重 0.64cm

茎長 10.8cm (一〇・五〇)

元中 2.36cm

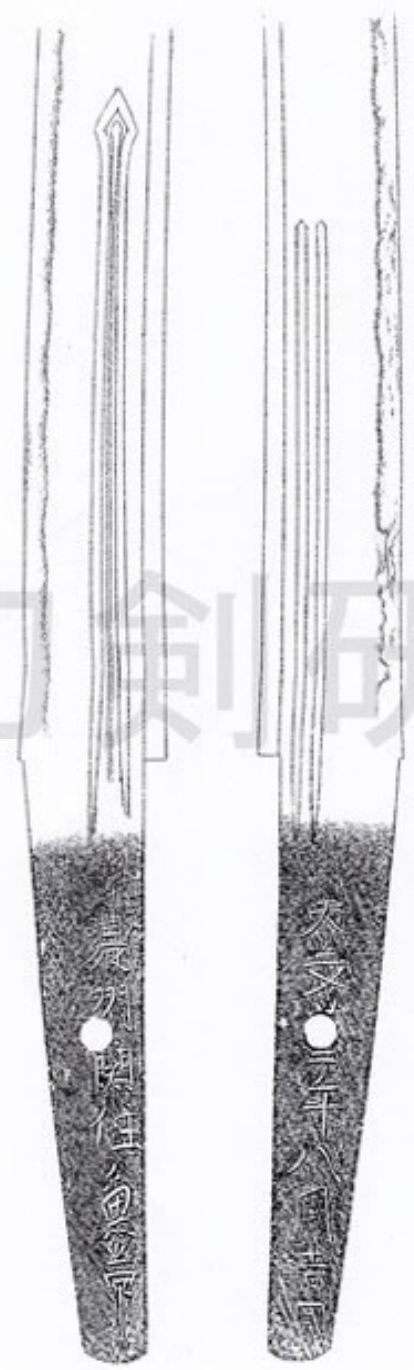
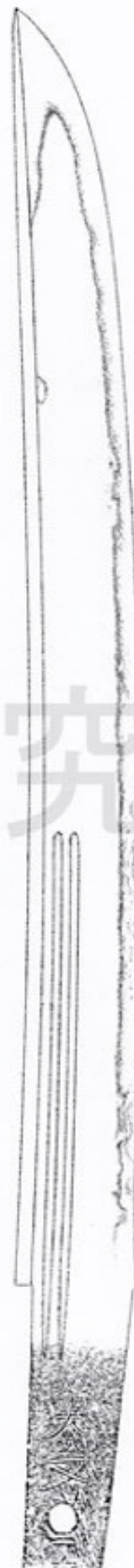
元重 0.64cm

茎長 10.8cm (一〇・五〇)

元中 2.36cm

元重 0.64cm

茎長 10.8cm (一〇・五〇)



刀剣研究連合